

My Diary

[Home](#)[Album](#)[RSS](#)

本来の「生老病死」

06 04 *2015 | 未分類

このブログのタイトル「笑老描私」は「生老病死」のもじりだということを、最初のブログに書いた。36歳のとき雲母書房を立ち上げてしばらくは、子どもや教育関係の本ばかり出版していた。三好春樹さんとはそのころ出会っているのに、まだ関心が「老病死」に向いていなかった。

40歳を過ぎてからだと思うけど、徐々に関心が「老病死」にシフトしていき、そういう仕事に携わる人との出会いが増えていった。そういう仕事というのは介護職・看護職・リハビリ職・医者である。三好さんの周辺には、管理的な組織のなかでうまくやれないタイプの人(これ、ほめ言葉)がたむろしていた。とくに、はぐれ介護職のみなさんの現状に対するルサンチマンは激しく、その負のエネルギーをプラスに変換していく中心軸が必要だった。そしてその渦の中心に、三好春樹がいたのだ。

こんなブログをだれが読んでくれるんだろうと、HPの設計者・白濱くんに尋ねたら、いろんなところにリンクを張ってくれた。まあ、アクセス数の多い三好さんのHPからこちらに飛んでこられる方が圧倒的に多いと思う。三好さんは昨年秋からFacebookを始めていて(このいきさは改めて書きたい)、そちらでもこのブログを紹介してくれているし…。

ぼくが「老病死」に興味をもつようになったのは(いまはそれに認知症も加わるのだが)、いま述べた人たちとの出会いと交流ももちろんだが、ずいぶん以前に読んだ遠藤周作のこんな文章に興味をもったこともそのひとつの起点になっている。

「人は老いて神に近づくという考え方が東洋にはあったでしょう。能の翁に私は神の姿を感じます。無理して『美しい熟年』なんて言ってるけど、熟年にしても、ましてや老年は美しくありません。美しくはないが神々しさというものをを感じる、そういう感じ方が私の子供の時にはあったように思います。むかし老人が尊敬されたのは「次なる世界」に近い人だったからです。「次なる世界」を我々が信じなくなってから、老人はもう尊敬の対象ではなく、せいぜい憐憫をかけるべき相手になりました」

「次なる世界」とは、必ずしも「あの世」とか「来世」のことを指すのではないだろう。それはたとえば、落日の直前に激しく燃え盛る夕焼けのように、人生のたそがれ時にならないと拓けてこない視界というものがあるのではないか。耳が遠くなって初めて、「次なる世界」からやってくるメッセージが聞き取れるようになる。あるいは、目がぼんやりとしか見えなくなって初めて、くっきりと見えてくるヴィジョンというものがあるのではないか。

それを遠藤は「老年になると、肉体も知性も衰えますが、知性のもつと奥にある魂によって、次なる世界から来る発信音を、肉体の時代よりも、知性の時代よりも聴くことができるのではないか」と言っている。

いまはおぼろげになってしまった「次なる世界」の消息を、自分自身をフィールドワークしながら、これから探ってみたい。

19:23

仕事もしてます報告

INFORMATION

日々の生活を気ままにつづった日記帳。

[RSS](#)[login](#)[Home](#)

CALENDAR

07 2017.8 09						
S	M	T	W	T	F	S
-	-	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	-	-
-	-	-	-	-	-	-

CATEGORIES

RECENT ENTRIES

- 全メール喪失事件
2016.06.18 18:06
[虐待の深層をめぐって④](#)
- 2016.04.05 19:56
[虐待の深層をめぐって③](#)
- 2016.04.02 12:40
[虐待の深層をめぐって②](#)
- 2016.04.01 13:19
[虐待の深層をめぐって①](#)
- 2016.03.30 12:38

RECENT COMMENTS

RECENT TRACKBACKS

06 03 *2015 | 未分類

ARCHIVES

2016.06(1) 2016.04(3) 2016.03(4)
2016.02(1) 2015.09(4) 2015.08(6)
2015.07(4) 2015.06(9) 2015.05(3)

SEARCH

 GO

何日か、ブログを書ける環境になかったので、この間のことを簡単に報告しておきたい。

28日は18時30分から、武蔵境駅向かいにある武蔵野プレイスで、宅老所いしいさん家の石井英寿さんの講演会があった。『人間だから、一緒だよ。』という、石井さんの本の出版(3月刊、すでに増刷)に合わせて、とうきょう地域ケア研究会が主催した。

主催者のとうきょう地域ケア研究会は、1991年の設立以来24年、月1回の例会をほとんど欠かしたことがないという任意団体。いまは、武蔵境を中心に例会がもたれている。毎回、ゲストを迎え話を聞く。そして、飲み屋さんに流れて懇親会。ぼくは、気まぐれ参加者なので、ときどきしか参加しないが、会の代表・山田穰さんや事務局を取り仕切っている宇佐神武捷さんの、今日まで途切れることなく継続させてきた意志力には、頭が下がる。

さて、石井さんの報告はおもしろかった。まず、5月17日にTBSの『駆け込みドクター！』で事業所が取り上げられたばかりということもあって、その録画を見せてもらった。若年性認知症の、かなり進行した男性利用者が多い。足腰は丈夫で、介護拒否も半端ではない。送迎車から降りてこない男性には、事務書類を用意しておいて印鑑を押してほしいと言って車外に誘い出す。こんなのはまだ序の口。どうしても風呂に入りたがらない、まだ70代とおぼしき男性には、石井さんがすかさず白衣に着替え、「医者です、診察させてください」と言って衣類をたくしあげる。男性は見る間に裸にされ、あっという間にふたりはお風呂にジャンプ！気持ちよさそうな男同士の入浴風景が映し出される。

続いて、女性スタッフが、自分の子どもをおんぶしながら介護している場面。スタッフの子ども、石井さん自身のお子さん...と、ここは保育園かと思いがうばかり。ともかく子どもが視界から消えることは一時もない。場の空気は子どもたちがつくりだしている。そこに年寄りが混ぜてもらっている感じだ。

...と紹介していくときがないが、だれが利用者で、だれがスタッフなのか、どこまでが仕事で、どこからが遊びなのか、それらが渾然一体となって1日が過ぎていく。大規模施設で働く介護職からは、スケジュールもないし、仕事なんてしてないじゃんと言われそう。介護の仕事を、食事や排泄、入浴の世話、レクリエーションの指導や行事への取り組み...と考えれば、確かにそうかもしれない。しかし宅老所が、たとえ通いとはいえ暮らしの場だとすれば、高齢者の1日があらかじめ決められたとおりに流れなかったって、なんの不思議もない。そのほうが、むしろ暮らし感覚に近い。

まだ話のとば口に差し掛かったばかりだが、このあたりのことは介護の核心にふれることなので、あらためて考えてみたい。

● ● ●

29日(金)は、東京の林野会館で、三好春樹さんがほんとうに久しぶりにまる1日、「関係障害論」の講義してくれた。なるほどケア塾主催のセミナーで、10時30分から講義が始まると、外はにわかにも雨模様。三好さんが雨男なのは、よく知られている。

18年前、最終的に6巻まで続くことになるシリーズ生活リハビリ講座の第1巻として、この「関係障害論」を出版させてもらった。この本の元になった1日半にわたる同名の講座が、全国の主要都市で開催されていた。それを聞いて、激しい感動に打ち震えたのを、つい昨日のこのように思い出す。そして、この本はどうしても自分の手で出版したいと思った。

このタイトルで、2,500円という定価(本体)で、しかもA5判上製本で、ほんとうに売れるのだろうか。評論家の芹沢俊介さんに帯の推薦文をお願いした。そこには、「この本で老人論に革命が起こった」と書かれていた。いま13刷なので、累計で2万5000部を超え、未だに細々とではあるが売れ続けている。それにしても、18年前といえば40代の後半に差し掛かったばかり。同学年の三好さんともども、若かったなあと思う。

この本で述べられている論の骨格は変わらないとしても、この18年の時代の変化をふまえて、2015年版の関係障害論を話してほしいとお願いしたのは、まだ雲母書房に在籍中の昨秋のことだったと思う。快く引き受けてもらったけど、どういう話になるのか、大きな期待と少しの不安を抱きつつ当日を迎えた。

しびれる話だった。とくに午後の講義では、論の切っ先はいままで見たこともない地平を切り開いていた。講義メモを何度も確認しながら、少しの沈黙を挟みつつ進んでいくスリリングな時間。こんなシーンは、久しく見たことがなかった。が、いまここでこれ以上深入りすること

はできない。稿を改めて、そこで語られたことを反芻してみたい。

● ● ●

31日は、さいたま市にある特養ホーム諏訪の苑を会場にお借りして、「認知症についての新しいケアの考え方」という1日セミナーを開催した(なるほどケア塾主催)。三好さんには、認知症についての講義を最初と最後のコマでサンドイッチしてもらい、その間にひとつの講義とひとつの実践報告を組み込んだ。

三好さんに続く講師は、昨年刊行された『認知症の「真実」』(講談社現代新書)の著者、ライター-の東田勉さん。ベストセラーになっているこの本の帯に「認知症は国と医者が作り上げた虚構の病だった」という三好さんの過激なコピーが載っているが、製薬会社とアベノミクスが画策している恐るべき国家的陰謀を、わかりやすく、実証的に話していただいた。とくに、アリセプトをはじめとする認知症治療薬の話は聞いていて背筋が寒くなった。すぐにも、国民的大啓蒙運動をはじめないと、われわれの老後は惨憺たるものになることだけは間違いがない。まだ読んでない人は、ぜひ読んでほしい。

それと呼応するように、午後の最初のコマでは、諏訪の苑スタッフが施設での減薬の取り組みについて報告してくれた。病院から施設に入所してくる人は、認知症薬を何年も服用している人がほとんど。無表情になり、意欲も減退している。薬の作用でその人の本来の姿が見えなくなっているのだという。そこから、減薬の取り組みが施設をあげて始まったのだ。その結果はどうだ。同じ人とは思えないほど、表情が生きいきしてきて、笑顔も出てくるではないか。

向精神薬は確実に減らせる。むしろ副作用が引き起こすリスクのほうがとんでもなく大きい。睡眠剤や下剤についてももしかりだ...。今回は、薬とのかかわりをとおして、諏訪の苑のケアの一端を見せていただいた。

諏訪の苑は、いまは170床の特養だが、来年4月には新たに150床の特養が誕生する。今後のケアの質の向上に向けた取り組みに期待したい。それについても、これから機会を設けて報告していきたいと考えている。

19:17

妙好人について・続き

05 28 *2015 | 未分類

妙好人について書きながら、なんで自分が妙好人に興味をもったのかを、なにも述べていないことに気づいた。なんか、まだ肩に力がいっているなあ。でも、このブログで宗教論を始めるつもりはないので、この話題はあまり引きずらないようにしなければ...

ぼくが妙好人に興味をもったのは、そこにひとつの自我の超え方を見たからである。鈴木大拙の言うように、才市さんからあふれ出ることばは「情性」的なのだが、平易なことばのなかに知的なものが現れ出ている。その知的なものを、鈴木大拙は「無分別智」と呼んでいる。それは無知ではない。無知を賞賛しているのではない。分別を超えたもうひとつの知のありようである。

つまり、道徳も倫理も思想も分別智から生み出されるものだとすると、そこを迂回する無分別智へのルートがあるということだ。分別まみれで理屈を片時も手放せないぼくなど、とうていたどり着けない世界だけだ。

一心不乱になにかに祈る人の姿に打たれることがある。人の心というのは外から見えないけれど、そこには形として外在化したスツピンの心が見えるからだろうか。

浅原才市の場合、阿弥陀さんへの感謝や生きる喜びは、その存在からあふれ出して、外からも感じられるのだろうか。その暮らしと信仰は、周囲の人をも感化せずにはおかない力を帯びているのだろうか。

一方、浅原才市の信仰と暮らしぶりこそが日本的霊性の極致だと鈴木大拙は言うが、そんなのひとりで悦に入っているだけの自己満足じゃん、という反論も当然あるだろうね。世の中

には、不正義や差別や貧困や死病や戦争がはびこっているではないか。それを直視するからこそ救済がテーマになるのではないか。

苦としての現世から衆生をくまなく浄土にお連れするのが真宗教団の根本方針だろうから、いまこを浄土そのもののように生きる才市さんの信仰には批判的なのかな。つまり、一心に「南無阿弥陀仏」を唱えるのは、彼方の浄土に至るためののに、そこに導くための数多の経典があるはずなのに、才市さんはそこを超えてしまっている。もはや南無阿弥陀仏は唱えるべき念仏ではない。南無阿弥陀仏に存在が溶け込んでしまっている。「阿弥陀の方からわしになる」というのは、そういう境地なのだろう。

これ以上の深入りは禁欲するけれど、妙好人に興味のある方は、たとえば『柳宗悦 妙好人論集』(岩波文庫)ほか、たくさん本が出ています。

14:28

妙好人(みょうこうにん)について

05 26 *2015 | 未分類

なにか舌足らずで、記念すべき第1回ブログは文章の後半が支離滅裂だった気がする。だが、それにとらわれていると前に進めないで、UPLした文章は触らないようにして、訂正や修正や誤字脱字は次の稿にまわすというのをルールにします。なんたって、「通り直しのできぬ道」なわけ。

前回、『大往生』のことばを引いて、なにげなく「妙好人」の箴言ですと紹介したが、どこかでそんな記事を読んだ気がただけで、確証はない。が、いかにも妙好人のことばっぽい。

妙好人というのは、人名ではない。浄土教(とくに真宗)系の、信仰に篤い、なにかに秀でたわけではない市井の人びとの総称のようなもの。鈴木大拙の『日本的靈性』を読んで、はじめてその存在を知り、興味をもった。鈴木は(えっと、本を書いたりしてる人は以降、敬称は略す)その代表として、浅原才市という人を紹介し、もうこれこそが信仰の本来の姿だと、大絶賛している。

浅原さんは1850年に生まれた島根県の人で、船大工から下駄職人になった、ごくごく一般人。木を削り下駄をつくりながら、心の底からあふれ出る喜び(宗教的法悦)と親さま(阿弥陀仏)への感謝を、その木屑に書き遺した。宗教者ではなく一般の信徒だから、教理や思想とは無縁の、飾りのない生きた信仰心をうたっている。

なむ仏はさいち(才市)が仏で、さいちなり
さいちがさとりを開く、なみあむだぶつ
これをもろ(貰う)たが、なみあむだぶつ

わしの心は、あなたの心
あなたところが、わたしのころ
わしにあるのがあなたの心

わしが阿弥陀になるじゃない
阿弥陀の方からわしになる
なみあみだぶつ

これからたびたび問題にするだろう近代的〈自我〉の毒を、存在の根底から易々と食い破ったひとつの典型をみる思いがする。こういう人が、いまも市井に埋もれてはいないか。

以下、『日本的靈性』から、鈴木大拙の妙好人に触れた文章を、ふたつ引く。
「才市は悟道の達人であった。彼は禅者のようにお悟りを振り回さない。いつも有難いとか、よろこばしいとか、うれしいとか、楽しいとか言って、知性的表現を用いぬ。これは浄土系の人々の特徴で、彼らは何事も情性的文字で述べる。しかしそれらの語彙のうちに、知性的なものはおのずから露(あら)われてくるのである」

「生きるということは、生きたということでない、また生きるだろうでもない、生き得べしでも、生くべしでもない。現にこうして生きているということである、念々刻々に生きていることである。それゆえ常住の創造である」

15:37

笑老描私について

05 25 *2015 | 未分類

まず、この珍妙なタイトルのブログを始めるにあたって、命名の由来について少し触れておきたい。

このホームページを制作してくれているのは、白濱くんという古い友人である。これまで、ときどき仕事の話とは別の近況メールを送ったりしていたのだが、それを読んで、文章がおもしろいからこの機会にブログを始めるよう勧められた。

最初、「たばこのあくび」というタイトルを提案された。頬をポンと軽くつついて煙を吐き出すと輪ができる。「円窓」という社名からその輪を連想したまではすばらしかったけど、実は、また禁煙を始めてしまったので、しばらくたばこの話題は避けたいとお断りした。

次に提案されたのがこの「笑老描私」を含む、6つくらいのもじり系のタイトル（「諸業無情」なんてのも）だった。もちろん、「社名の由来」に「生老病死」というフレーズを使ったので、そこからヒントを得たもの。一読、これにしようと思った。

というのも、このホームページの打ち合わせで彼と会ったつい先日、まさか俺たち、高齢者と呼ばれる年まで生きるとは思わなかったなあ、と笑い合ったばかり。彼とぼくは早生まれの同学年だからもう少しばく間があるとはいえ、同級生たちはいま続々と65歳を迎えている。

還暦のときは、まだ「高齢者」になったという実感はなかったが、65歳といえばWHOが定義する立派な「前期高齢者」であり、ここ最近では、加齢による心身の衰えの兆候が少しずつ表れ始めてもいる。「マジかよ。俺たち、高齢者なんだって。笑っちゃうよ」というこそばゆいような感覚は、「笑老」という語感にぴったりというのが、このタイトルを支持したひとつの理由である。

もうひとつは、永六輔の『大往生』という本に出てきた箴言を思い出したから。それは「子供叱るな来た道だもの 年寄り笑うな行く道だもの」という妙好人のことばである。ここで戒めているのは、年寄りを侮蔑した笑いだろう。しかしその反面、ぼけた年寄りがとてもユーモラスな面をもっているということは、この20年、介護業界の人びとと関わって教わったことである。その挙動が思わず笑いを誘い出し、まるで仕組んだように場を和ませる力がある、と。嘲笑の真逆にあるもうひとつの笑いとはなにか、考えてみたいテーマである。

さて、この妙好人の箴言には続きがある。

「来た道 行く道 二人旅 これから通る今日の道 通り直しのできぬ道」

二人旅というのは、阿弥陀様とふたりという意味だろう。

そうか、1日1日を大切に生きなくては、と神妙な気持ちにさせられますね。（合掌）

14:13

[newer](#) [older](#)page [1](#) [2](#) [3](#) [4](#)[HOME](#) [RESET](#) [△](#)

